

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	松井 幸太
2. 審査委員	主査：（鳴門教育大学教授） 山下 一夫 副主査：（兵庫教育大学教授） 富永 良喜 委員：（鳴門教育大学教授） 田村 隆宏 委員：（鳴門教育大学教授） 大谷 博俊 委員：（鳴門教育大学准教授） 小倉 正義 委員：（鳴門教育大学教授） 梅野 圭史
3. 論文題目	高等学校の運動部活動における指導者の関わりと生徒の心理的成長
4. 審査結果の要旨	<p>学校教育実践学専攻学校教育臨床連合講座 松井 幸太 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：平成28年2月7日（日） 14:00～14:50</p> <p>場所：鳴門教育大学 人文棟6階 A3会議室</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>【論文の構成】</p> <p>第1章 運動スポーツ場面における生徒の心理的成長</p> <p>第1節 運動部活動と生徒の心理的課題</p> <p>1. 運動部活動の教育的意義</p> <p>2. 運動部活動の競技化と生徒の心理的課題</p> <p>第2節 指導者の関わりと子どもの心理的側面</p> <p>1. 子どもの心理的側面に与える指導者の関わりの影響</p> <p>2. 指導者の関わりと子どもの内発的動機づけ</p> <p>3. 指導者の指導行動に対する生徒の認知と生徒指導者関係</p> <p>第3節 本章のまとめ</p> <p>第2章 本研究の目的</p> <p>第3章 指導者のフィードバック行動および親和的信頼関係と生徒の内発的動機づけ（研究1）</p> <p>第1節 目的</p> <p>第2節 方法</p> <p>1. 対象者と調査時期</p> <p>2. 手続き</p> <p>3. 質問項目</p>

第3節 結果

1. 尺度項目の整理
2. 親和的信頼関係ごとの指導者のフィードバック行動と生徒の内発的動機づけ
3. 指導者のフィードバック行動および親和的信頼関係と生徒の内発的動機づけ
4. 生徒の属性による影響

第4節 考察

1. 下位尺度の各項目の平均値の検討
2. 親和的信頼関係ごとの指導者のフィードバック行動と生徒の内発的動機づけの関係
3. 指導者のフィードバック行動および親和的信頼関係と生徒の内発的動機づけの関係
4. 各要因に対する生徒の属性による影響

第5節 本章のまとめ

第4章 生徒の認知する指導者像と生徒の依存性（研究2）

第1節 目的

第2節 方法

1. 対象者と時期
2. 手続き
3. 質問項目

第3節 結果

1. 尺度項目の整理
2. 生徒の認知する指導者像の分類
3. 生徒の認知する指導者像と生徒の依存性
4. 生徒の属性による影響

第4節 考察

1. 下位尺度の各項目の平均値の検討
2. 生徒の認知する指導者像と依存性
3. 各要因に対する生徒の属性による影響

第5節 本章のまとめ

第5章 生徒の認知する指導者像と運動部活動へのオーバーコミットメントおよび参加動機の自己決定性（研究3）

第1節 目的

第2節 方法

1. 対象者と時期
2. 手続き
3. 質問項目

第3節 結果

1. 尺度項目の整理
2. 生徒の認知する指導者像の分類
3. 生徒の認知する指導者像と運動部活動へのオーバーコミットメント
4. 生徒の認知する指導者像と運動部活動への参加動機の自己決定性
5. 生徒の認知する指導者像と運動部活動へのオーバーコミットメントおよび参加動機の自己決定性
6. 生徒の属性による影響

第4節 考察

1. 下位尺度の各項目の平均値の検討
2. 生徒の認知する指導者像と運動部活動への参加動機の自己決定性
3. 生徒の認知する指導者像と運動部活動へのオーバーコミットメント
4. 生徒の認知する指導者像と運動部活動へのオーバーコミットメントおよび参加動機の自己決定性
5. 各要因に対する生徒の属性による影響

第5節 本章のまとめ

第6章 総合考察

第1節 生徒の認知する指導者像ごとの生徒の心理的特徴

第2節 生徒と指導者の関係

第3節 生徒の属性による特徴

1. 性による特徴
2. 学年による特徴
3. 部内における生徒個人の競技水準による特徴
4. 部全体としての競技水準による特徴
5. 競技種目による特徴

第4節 総括

第5節 本研究の課題

【論文の概要】

学校教育の一環である運動部活動は教育的活動であると同時に、競技スポーツとしての側面もあわせもち、競技力の向上や勝利の追及といった競技成績に対する期待も大きい活動である。そのため、運動部活動の指導者は、教育的な役割と競技的な役割を同時に求められることになるが、競技スポーツとしての意識が高まるほど、指導者はじっくりと育てる指導よりも早期に教え込む指導へと傾いてしまいがちになる。そうした指導環境の中で、生徒の自発性や独創性が育まれにくいことが指摘されている。

教育的期待や競技的期待の高まりとともに、多くの生徒が積極的に運動部活動へ参加しており、時に過剰なほどに運動部活動に専心することも少なくない。生徒の取り組みがオーバーコミットメント傾向を呈すと、身体的心理的負担の増大や家庭生活への影響、勉強や趣味との両立などさまざまな支障が生じうる。運動部活動に対する魅力ややりがいといった自分自身の欲求から活動に専心する面もあるが、一方では他者からの期待や願望などが関連し合い活動に影響を与えている側面もあると思われる。生徒本人の欲求よりも他者の欲求に大きく影響を受けているような場合には、生徒の内的な思いが抑圧され、不適応的な状態へとつながっていく。つまり、周囲の期待に応えることのみを優先し、自らの願望や欲求を抑制して活動に打ち込むという過剰適応状態が懸念される。

以上のような運動部活動の現状より、指導者の関わりと生徒の心理的課題を検討していくにあたって、生徒の運動部活動体験の質を左右する要因の一つである生徒と指導者の関係に着目して検討していくことが求められる。したがって本論文では、運動部活動における指導者の関わりと生徒の心理的成長について、生徒と指導者の関係に注目して検討を行った。

研究1（第3章）では、指導者の関わりと生徒の心理的側面との関連について検討していく際に、生徒と指導者の関係がより重要な要因となっていることを確認するため、運動部活動所属の高校生1071名を対象に質問紙調査を実施した。そして、生徒の内発的動機づけに対して、指導者のフィードバック行動、および生徒と指導者の関係が及ぼす影響について検証を行った。

結果より、第1に、生徒の内発的動機づけに対する指導者のフィードバック行動の影響は、生徒と指導者の関係によって異なり、懲罰的なフィードバック行動であっても、生徒と指導者の親和的信頼関係が築けている場合には、効果的に作用することが示された。第2に、生徒の内発的動機づけに対して、指導者がどのようなフィードバック行動をするかということよりも、生徒と指導者がどのような関係であるかということが大きな要因であることが示された。そして、生徒と指導者の親和的信頼関係を築くにあたって、指導者のフィードバック行動が影響を与えており、指導者の称賛励ましが多く、無視の少ない指導が効果的であることが示唆された。

研究1より、指導者の指導行動よりも、むしろ生徒と指導者の関係の在り方のほうが、生徒の心理的側面により大きな影響を与えていることが示された。そのため、研究2（第4章）および研究3（第5章）では、運動部活動所属の高校生978名を対象に質問紙調査を実施した。そして、生徒が認知する主観的な心的表象としての生徒と指導者の関係を捉えるため、指導者の関わりに対する生徒の認知を尋ねることによって生徒の認知する指導者像とした。つまり、指導者の受容的な関わりと統制的な関わりという2つの視点から生徒の認知する指導者像を捉え、それぞれの指導者像ごとに生徒の心理的特徴を調べた。その結果、生徒の認知する指導者像は、受容型、統制型、両高型、両低型の4つに分類できた。

研究2では、生徒の指導者に対する依存性について、生徒の認知する指導者像ごとにその特徴を検討した。結果より、受容型では、統合された依存性が比較的高く、依存欲求が低かったことから、指導者に対して過度に依存的になりすぎることなく、自己の判断基準をもちつつ、必要に応じて指導者に頼ることのできる自立的な依存の形態が示された。統制型では、統合された依存性は低く、依存欲求が高かったことから、いわゆる“依存的”で未熟な依存性が示された。両高型では、統合された依存性も依存欲求もともに高かったことから、指導者に対する未熟な依存性も、自立的な態度もあわせもつ依存の形態であった。両低型では、統合された依存性も依存欲求もともに低かったことから、指導者との関係が希薄であるがゆえに、自立の前提である依存的関係が課題となっていることが示された。

研究3では、運動部活動へのオーバーコミットメントと参加動機の自己決定性について、生徒の認知する指導者像ごとにその特徴を検討した。まず両高型の特徴として、自律的動機と他律的動機がともに高く、オーバーコミットメントも高かったことから、自らの興味関心により自律的に活動しているが、他者からの評価や期待がさらなる活動への動機づけとなっており、その取り組みはオーバーコミットメントとなっている可能性が高かった。反対に統制型と両低型では、自律的にも他律的にも参加動機が低く、オーバーコミットメントも低かった。最後に受容型では、自律的動機が両高型に次いで高く、他律的動機は低かったことから、他律的な動機ではなく自律的な動機により運動部活動に参加していると考えられる。そして、オーバーコミットメントは中庸であり、適応的な取り組みであった。

また本論文では、指導者の関わりと生徒の心理的側面について生徒と指導者の関係に着目して検討を行ったが、これらの要因の関連について生徒の属性からの比較も行った。つまり、性別や学年のみならず、生徒の競技水準（レギュラー・準レギュラー・非レギュラ）および部全体の競技水準（地区大会・都県大会・全国大会）、さらに競技種目（個人競技・集団競技）から、それぞれの属性における生徒の心理的特徴についてもまとめることができた。

2. 審査経過

・独創性および学校教育実践への貢献

本論文における独創性として、まず、指導者行動が生徒の心理的側面に与える影響について、生徒と指導者の関係に着目して検討したことである。生徒の認知する指導者像を用いて4パターンの生徒と指導者の関係に分類し、指導者像ごとの生徒の心理的特徴に関して実証を試みたことが高く評価された。また、生徒の心理的特徴に関して、運動部活動における生徒の心理的課題である生徒の依存と自立の課題および過剰適応の課題に焦点をあて検討されている点も貴重である。さらに、上記の検討をより個別的に実証するため、性別・学年・競技水準・競技種目に分けて、各生徒の属性ごとに比較している。

以上のように、指導者の関わりと生徒の心理的特徴に関して、生徒と指導者の関係や生徒の属性ごとに検討されていることから、運動指導現場の指導者にとって、各生徒との関係や生徒の属性を考慮したうえで、生徒の心理的成長に寄与する指導者の関わりを考えるための貴重な知見を提示した実証的研究であり、高等学校において大きな位置を占める運動部活動に関して現場教員にとって役立つ内容であると高く評価された。

・発展性

今後の発展性として、次の2点が挙げられた。一つは、運動部活動における実際の状況にさらに迫るため、現場に求められる要因を多角的に選定し、尺度構成の信頼性や妥当性を確保したうえで、量的な研究を積み重ねていくことである。もう一つは、個人の内的な理解に迫るため、質問紙レベルだけではなく、面接法、事例研究法、エスノグラフィーなどの質的調査を展開していくことである。これら2つの方向からの接近により、さらに現場の状況を反映したより実践的な示唆を得ることが可能となる。

3. 審査報告

以上により、本審査委員会は、松井幸太の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。